

## 論文博士審査報告書

平成 29 年 1 月 29 日

申請学位： 博士（安全保障）  
学位申請者： 丹羽 文生（ニワ フミオ）  
所属： 拓殖大学海外事情研究所准教授

論文題目： 「国内問題」としての「日中問題」  
一日中国交正常化の政治過程と日台関係 1960-1972—

英文題目： Issues between China and Japan Seen from a Japanese Perspective: Political process for the normalization of diplomatic relations between China and Japan, and Japan-Taiwan relations 1960-1972

審査委員会： 主査 国際学部教授 佐藤 丙午  
副査 海外事情研究所所長 川上 高司  
副査 海外事情研究所教授 名越 建郎  
副査 千葉科学大学教授 小枝 義人

### I 論文の要旨

1972 年 9 月の日本と「中華人民共和国」との日中国交正常化、台湾にある「中華民国」との断交は戦後日本外交を画する大きな出来事であった。本論は、日中問題が具体的な政治問題となり始めた池田勇人内閣から、佐藤栄作内閣を経て、「日中共同声明」調印と相成った田中角栄内閣期までの凡そ 12 年間を対象期間に、日中国交正常化と、台湾との断交の政治過程を論じた。言わば、今日の日中関係、日台関係の起点を検証したのが本論である。

先行研究では、主として 1971 年 7 月の「ニクソン・ショック」に象徴される米中接近、10 月の中国の国連加盟と台湾の国連脱退といった国際政治環境の劇変によって、日中国交正常化が可能となったとする見方が大半であった。しかしながら、外交は内政の延長と言われるように、戦後日本の対中外交も、国際政治環境の変容による戦略的判断というよりは「国内問題」、即ち 1955 年 11 月の保守合同以来、政権与党の座を独占してきた自民党の党内力学に左右されてきた。日中問題の核心とも言える台湾問題が、対中政策の形成過程において主流派と反主流派、あるいは日中関係を重視する親中派議員、日台関係を重視する親台派議員との抗争、対立と密接にリンクしながら展開されて

きた。

日中問題の史的展開を検証する場合、国際政治環境の趨勢を鳥瞰するマクロな見地は不可欠である。しかし、同時に、その行動主体となった人々の動向をミクロの見地で検証しなければ全てを完全に理解することはできない。本論においては、日中問題を国内問題として捉えながら、そのダイナミズムを可能な限り忠実に描いた。

本論では先行研究に依拠しながらも、全体を通じて空白部分を埋めるべく先行研究では使用されなかった参考・引用文献、中国や台湾で刊行されている出版物、外務省の外交史料館所蔵、情報公開法に基づく外交記録・情報公開室への開示請求によって入手した外交史料、台湾の中央研究院近代史研究所檔案館に保存されている外交部の「檔案(外交史料)」を活用した。さらに当時を知る人々へのインタビューを通じて、事実関係の確認、エピソードを丹念に拾い上げながら独創性を捻出した。その中には、これまで語られてこなかった史実、従来の通説を覆す新たな証言も存在した。

## II 論文の構成

### 序章 本論の視座

#### 第1節 研究動機

#### 第2節 先行研究と本論の分析方法

#### 第3節 本論の焦点と仮説

#### 第4節 「中華民国」を選択した戦後日本外交

### 第1章 池田外交と日中台関係

#### 第1節 日中貿易促進と日台関係の危機

##### 1 池田内閣発足

##### 2 池田訪米と訪欧

##### 3 LT貿易

##### 4 張群来日と周鴻慶事件

#### 第2節 日台関係の修復

##### 1 吉田訪台に向けた準備

##### 2 吉田・蔣介石会談と吉田書簡

##### 3 大平訪台と張群再来日

### 第2章 佐藤外交における中台パランスの模索

#### 第1節 佐藤と中国問題

##### 1 佐藤の対中観形成過程

##### 2 「S オペ」の対中政策に関する提言

### 3 佐藤内閣始動

#### 第2節 強まる中国側の攻勢

- 1 佐藤訪米と中国問題
- 2 悪化する日中関係
- 3 佐藤訪台と蔣経国来日
- 4 MT 貿易

#### 第3節 ニクソン・ショックと国連における中国代表権問題

- 1 アメリカの頭越し外交
- 2 水面下における中台双方との接触
- 3 「中華人民共和国」の国連加盟と「中華民国」の国連脱退

## 第3章 宰相の椅子と中国問題

### 第1節 宰相への道

- 1 田中と中国問題
- 2 日中国交正常化へのシナリオ
- 3 中国側からの要請
- 4 親中派議員との接触
- 5 加速する田中の勢い
- 6 戦後最年少の宰相

### 第2節 田中内閣発足

- 1 天下獲りの後遺症
- 2 野党外交
- 3 「竹入メモ」の意味合い
- 4 訪中決断
- 5 上海舞劇団の来日
- 6 台湾側の焦り

## 第4章 椎名特使派遣における日台間の駆け引き

### 第1節 椎名の特使起用

- 1 日中国交正常化協議会
- 2 ハワイ会談
- 3 椎名の特使受諾
- 4 インフォーマルな要請
- 5 断交準備
- 6 個人レベルでの情報収集と宣伝工作
- 7 田中親書の起筆過程

- 8 椎名の苦悩
- 9 幻のステートメント

## 第2節 椎名訪台へ

- 1 冷淡な扱い
- 2 相次ぐ会談
- 3 中華民国民意代表，日本国会議員座談会
- 4 椎名・蔣経国会談
- 5 激怒した周恩来
- 6 蒋介石からの返簡

## 第5章 田中訪中と日中国交正常化

### 第1節 訪中前夜

- 1 一命を覚悟
- 2 機内の田中

### 第2節 交渉初日

- 1 周恩来との握手
- 2 第1回会談
- 3 周恩来の逆鱗に触れた「ご迷惑」発言

### 第3節 交渉2日目

- 1 高島への罵倒と「ご迷惑」発言の波紋
- 2 栗山の腹案と橘本の妙案

### 第4節 交渉3日目

- 1 車中会談
- 2 尖閣諸島への言及
- 3 突然の呼び出し
- 4 毛沢東との会談模様
- 5 『楚辞集注』贈呈の意味合い
- 6 最後の詰め
- 7 交渉妥結へ

### 第5節 交渉4～6日目

- 1 台湾への事前通告
- 2 調印式
- 3 上海へ
- 4 対日断交宣言
- 5 帰国

## 終章 結論

### 第1節 機会主義的動機

### 第2節 現代への示唆

- 1 「角福戦争」と日本の対中外交
- 2 政治主導
- 3 対中外交における態度
- 4 「歴史研究」の新たな視点

## 参考・引用文献

### 参考資料

- ① 小谷秀二郎が台湾側に渡した「竹入メモ」の要旨
- ② 正木良明がS教授に洩らしたとされる竹入・周恩来会談に関するレポート

## III 論文（各章）の概要

本論は序章と終章を含め、全7章から構成される。

序章「本論の視座」では、本研究に取り組むに至った動機、先行研究の整理と本論の分析方法、本論の焦点を明らかにし、仮説を立てている。さらに、本題への前置きとして、日中国交正常化に向けた動きが具体化する以前の日中台関係、東アジアにおける国際政治環境を俯瞰した。

第1章「池田外交と日中台関係」では、当時、外交関係のあった台湾と断交寸前に陥ってまでも日中関係強化に努めた池田の対中外交について論じた。日米安保条約改定の反対騒動の余韻冷めやらぬ中、「政治の季節」に終止符を打ち、世の中を「経済の季節」に移行させるため「高度経済成長」をスローガンに「国民所得倍増計画」を打ち立てた池田は、一般に経済一辺倒のイメージが定着している。事実、池田にとって外交問題は不得手な分野だった。

だが、広大な面積と巨大人口を有する中国という隣国を全く無視することは不自然極まりないとの素朴な感情を梃子に、プラグマチストとして日中貿易推進に取り組み、延いては日中国交正常化への道筋を立てようともしていた。その壮大な計画の背後には何があったのか。外務省の外交史料を使って分析した。

第2章「佐藤外交における中台バランスの模索」では、佐藤が模索し続けた中台間におけるバランス外交の実態を、外交史料や佐藤の日録をベースに論じた。佐藤は一般に反中派、台湾鼻根と思われがちである。

確かに、その政権基盤は親台派議員によって支えられており、あるいは人的関係、血縁関係の印象から言っても台湾寄りと見做されるのは自然であった。中国の反発を無視して台湾に乗り込み、国連における中国代表権問題でも親中派議員の批判を躲しながら、アメリカの提案する「逆重要事項指定方式」と「複合二重代表制」の共同提案国になる

ことを決断し、最後まで蒋介石率いる国民政府に配慮し続けた。

他方、佐藤は、「台北から北京へ」という世論の動向に加え、中国のプレステージが次第に強まっていく国際社会の流れを敏感に読み取り、日中国交正常化も視野に入れながら、あらゆるルートを使って密かに中国側にメッセージを送っていた。これは結果的には失敗に終わるが、佐藤による土台固めがあったからこそ、日中国交正常化は勿論、台湾との断交も、報復措置のない円滑な処理ができた。

第3章「宰相の椅子と中国問題」では、首相就任前後において田中が、どのように日中国交正常化への布石を打っていったかについて、先行研究に抛りつつ論じた。田中は首相就任の1年以上も前から逆算し、日中問題に精通する外務省アジア局中国課長の橋本恕に日中国交正常化に向けた行程表を作らせ、就任した後は中国とパイプのあった社会党や民社党まで懐深く巻き込んで水面下での折衝を進めた。中でも公明党委員長の竹入義勝は田中の密使のような形で訪中し、周恩来と周到な下準備を重ねている。

ただ、田中は当初、決して日中国交正常化には前向きではなかった。仮に日中国交正常化が実現したとしても、台湾との外交関係は従来のまま存続すべきとも主張していた。しかし、政権奪取のためには自民党の大半を占めていた推進派の支持が必要である。そう考えた田中は、日中国交正常化の実現と引き換えに彼らを味方にした。

これが、慎重派で最大のライバルだった福田赳夫を追い落とすための決定打となった。田中は宰相ポストを射止めるために日中問題を利用したとも言い換えることができる。後に自民党史上最大の危機を招いた「角福戦争」の端緒であった。

第4章「椎名特使派遣における日台間の駆け引き」では日本と中華民国との断交前夜の交渉過程を論じた。日中国交正常化は、同時に台湾にある中華民国との断交を意味していた。幕末の開国以来、日本が戦争以外で断交したのは、これが初めてである。それは単に外交関係が杜絶するだけでなく、仮に、その方法を誤れば戦火を交える事態にまで発展しかねないほど深刻な意味を持っていた。

日本と台湾は1895年4月から1945年10月まで50年間に亘って歴史を共有し、戦後は日華平和条約に基づいて20年間、中華民国との外交関係を維持してきた。外交方針の変更というドライな割り切り方で断交するわけにはいかなかった。

中華民国に対し、どう理解を求めるか。余りに短絡的に過ぎる田中の進め方に抵抗しながらも、特使として台湾に引導を渡す汚れ役を演じることとなった自民党副総裁の椎名悦三郎は、日台間の狭間で苦悶し続けた。

椎名訪台時、台湾側の扱いは極めて冷淡であった。それでも椎名は「信義と礼儀」を尽くし、「台湾の面子」を保とうと真摯に対応した。だからこそ、断交後も従来通りの実務関係が継続され、今日の緊密、良好な日台関係へと発展していったのであろう。

中華民国との断交に関する先行研究は、日中国交正常化を論ずる際の添え物に過ぎないと見做されてきたためか、日本で公開されている外交史料も日中国交正常化のそれと比較すれば決して多くはない。本章では台湾にある外交史料も精査しながら検証した。

第5章「田中訪中と日中国交正常化」では、田中訪中の5日間（1972年9月25日～30日）について論じた。宰相の椅子を手にした田中は、僅か2ヵ月余りの速さで北京に飛んだ。だが、日中国交正常化の基礎となる日中共同声明の内容を詰める交渉は、そう簡単には進まず、特に台湾の扱いに関して侃侃諤諤の鏝迫り合いが演じられた。妥協案が見出せず、交渉は暗礁に乗り上げる。外務大臣の大平正芳を始め外務省の随員たちは意気消沈した。そんな彼らの支えになったのが田中だった。中国入りしてからの田中は交渉に全く口を挟まなかった。その代り、失敗した場合の全責任は自らが取ると言いながら、彼らを励まし続けたのである。終盤に入り、ようやく合意の兆しが見えてきた頃、田中と毛沢東との会談が実現する。田中訪中のハイライトであり、本章のクライマックスでもある。同行したのは大平、官房長官の二階堂進のみだった。日本側からは通訳も記録係も同席していない。そのため外務省には会談記録は残っておらず、中国側からも詳細な発表はなく、今でもベールに包まれた部分が多い。本章では二階堂の出したプレスリリースと併せて、中国における先行研究、毛沢東や周恩来の談話、メモワールによって、その全容を分析した。

以上の論考により、終章「結論」において仮説に対する回答、日中国交正常化を繙く現代的意味合いを論じる。最後に台湾で発見した日本では未公開、入手困難な外交史料を参考資料として掲載した。

#### IV 論文の総合評価

##### 1. 論文提出から審査までの経緯

本論文は、2016年9月に論文博士の申請論文として大学院に提出された。その後、所定の手続きを経て、受理審査委員会が編成された（委員長：佐藤丙午）。受理審査委員会は、本論文が論文博士にふさわしいと判断し、同時に丹羽文生氏の業績を検討し、2016年11月の研究科委員会に審査報告書を提出している。

11月の研究科委員会で承認されたのち、12月に本審査委員会の設立が決まり（委員長：佐藤丙午）、千葉科学大学の小枝義人教授を委員に加えて審査を行った。口頭審査は2017年1月24日に、拓殖大学文京キャンパスで開催した。

##### 2. 審査所見

口頭審査では、各委員より論文や、丹羽氏の研究活動の方向性等についての質問があり、丹羽氏との間で活発な質疑応答が行われた。

まず、委員の方から、丹羽氏がオーラル・ヒストリーとドキュメンタリー・ヒストリーの中間領域を開拓しようとした試みと、それを日中国交正常化という重大なテーマで試みたことへの評価と感謝が述べられた。この上で、委員はまず、丹羽氏が本論文で書ききれなかったことを聞いた。丹羽氏は、断交後の日台関係を十分に掘り下げていない点を認め、今後はドキュメントの発掘を中心に、当該領域の問題を扱っていきたいと述べた。

さらに、委員より歴史研究にオーラルな手法を持ち込むことの利点と問題について質問があった。丹羽氏は、日本の歴史学の問題点は、事実関係の羅列や、理論に固執する点であり、時代の空気感や手触り感ともいうべき、人間の営為の所産としての歴史が描き切れていないことにあると指摘した。ただし、空気感を重視すると、アカデミックではなくノンフィクションを描くジャーナリストになってしまうため、その中間領域の研究手法の進化の重要性を強調した。

ある委員は、本論文の対象範囲は丹羽氏自身が論文にしており、そこを新たな手法で掘り下げて博士論文にするのは驚異的である、とした。その上で、丹羽氏が日中国交正常化が日米関係に及ぼした影響について言及していないのはなぜか質問した。特に、田中首相の失脚に、ニクソンや、米中国交正常化に向けて努力したキッシンジャーの影響があるのではないか、という論点をどう考えるか質問した。丹羽氏は、田中はキッシンジャーより直接訪中延期を要請されており、それを無視して訪中したため、米国が反発したという事実は確認できるとした。ただし、それが失脚につながったかどうかを証明するのは困難であるとした。

さらに、日中国交正常化の背景に、中国の国内政治があることについて確認の質問が出た。毛沢東と周恩来は文化大革命で失敗して、失脚の危機にあった。そのような立場の指導者の、形成逆転の妙手が日中国共正常化の成功であった、という視点である。丹羽氏は、日中国交正常化までに、周恩来は全国を講演行脚して、その必要性を説明していることを紹介した。国内政治の問題については、他の委員からも指摘があり、日中もしくは日台間の仲介をした政治家や関係者の記録の重要性が強調された。丹羽氏は、彼らの活動は公式な記録に残らないために、オーラルな手法とドキュメントの組み合わせのみがそれを浮かび上がらせることができることを強調した。

委員の一人は、本論文が時代の断面を再現したことに驚きつつ、丹羽氏がさらに日中国交正常化以降の日中関係の評価について踏み込み、そこから田中の政策の功罪を評価すべきであったと述べた。丹羽氏は、委員の指摘に同意しつつ、田中の政策を評価し、日本が中国の国内政治の状況を利用した側面があったことを指摘した。大平内閣の際に、賠償の意図を含んだ対中 ODA が開始されたが、これは田中などの国交正常化の意図を間違えたものととらえるべきとした。

### 3. 審査委員会結論

委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（安全保障）」の学位を授与するに値するものと認めた。

以上